

## 意見

谷 隆 一 郎

「スピノザとはこれほど魅力ある思想家だったか」というのが、柴田寿子女史のお話を伺ってまず感じたことである。ただ筆者は、御発表の全体像を十分に捉えているとは言えず、殊更に意見などを記すにふさわしい者ではないのだが、恐らくはスピノザの法・政治論の基底に存する一つの問題についてのみ少しく問いを提示し、今回の責めを塞ぎたいと思う。

スピノザによれば、「信仰が救いをもたらすのは信仰それ自体においてではなく、ただ服従という点においてのみ」だという。それは、ロックなどの「信仰のみが、そして誠実な心だけが、確実に神に受け入れられる」とする見方に対するものであった。この場合、「服従」とは、神への服従と同時に、神権を担い体現する宗教的共同体への服従という、次元を異にする二つの意味合いを有しよう。それゆえ、先の表現においてスピノザは、信仰というものをいたずらに内面化・秘教化してしまうことを避けつつも、単に信仰よりも服従を優位に置いたのではなく、「信仰という魂のかたち」と「信仰が外なる行為として顕現してくるかたち」との緊張した関わりを問題にしたのであろう。ここに信仰とは、神的働きを魂・人間が受容したかたちであろうが（ヘブライ 11・1 など）、その名に値する信仰はおのずと愛を通して働き（ガラテア 5・6）、外なるわざ・行為として現れてくる。この点、くだんの文脈では、古より神権を担い、歴史のうちに持続しているユダヤ教ならユダヤ教の神権共同体への服従というかたちで信仰は顕現し、また他方、神権共同体への服従は、無限なる神的働きへの心の披き・信仰がなければ、生命なき形骸化したものに終るであろう。

この意味では、「真理と知恵」と「敬虔と服従」との両領域の分離と相互不干渉が語られるのは、やや分りにくい。だが、それは、「大衆が帰依するそれぞれの宗教を自然的認識である理性が裁き強制することに反対」してのことであって、理性の自閉的な傲りが碎かれ突破されゆくときには、両領域は新たに同根源的なものとして結びついてくると考えられる。すなわちそこには、「無限なる神性への披き」が、「神権共同体への服従という有限なかたち」として顕現してくるような、微妙な関係性の構造が窺われよう。

恐らくスピノザは、現実には自らの出自たるユダヤ教共同体から破門されつつも、上のような「信仰と服従」、「無限なるものへの披きと有限なるわざとしての顕現」との緊張した関わりに、つねに目を注いでいたのではなかろうか。つまり、単に開き直って当時の神権共同体を否定し自らに閉じこもることなく、本来あるべき、そして将来成就してゆくべき神的共同体への服従を語ったと思われる。そのことによってスピノザは、宗教的かつ哲学的諸派の拮抗する往時の精神状況を担いつつ、それらが統べられ再統合されゆく境位を、すなわち、それぞれに差異性を保持しながら、根拠にして目的なる神をそれぞれの仕方で表現し、すべてが相俟って真に全一的な神的共同体が実現してゆく境位を志向していたのではなかろうか。